

## 第8期第3回府中市美術館運営協議会報告書

日時 平成27年11月21日(日) 午後2時～4時

場所 府中市美術館会議室

出席者 委員(順不同・敬称略)

薩摩雅登、谷矢哲夫、中村一哉、大杉健、西郷美絵、米谷一志、  
隠岐由紀子、吉田裕子、清水正人、金津道子、佐藤静夫

事務局

藪野館長、須恵副館長、堀管理係長、志賀学芸係長、  
武居教育普及担当主査、

傍聴者 なし

内容

- 1 開会
- 2 府中市美術館運営協議会会長挨拶
- 3 府中市美術館館長挨拶
- 4 議題  
(1)平成27年度前期美術館関連事業等について  
事務局より資料に沿って説明

資料についての質疑応答

Q 来年度は立石鐵臣展を実施するのか。作品や資料はどこから収集する予定なのか。

A 予算が承認されれば、平成28年度に開催予定です。作品は主に遺族からお借りする予定です。作品の多くを遺族が所有しており、これまで未開示の作品が多くありましたが、この夏、都内の画廊にて個展が開催され、全体像を見ることができませんでした。立石鐵臣の作品全体について、当館で広く紹介することができればと思っています。

Q これまで全貌が明らかになっていない作家なので、とても意義のある企画展になるだろうと期待している。開催するとして、単独開催か巡回展にするのか。

A 当館単独での開催を予定しております。

Q 5月に開催した5人展もそうだが、地域にゆかりのある作家が集まり、私たちの住んでいる武蔵野という土地が、いかに美術とつながりを持っているかを紹介してもらえて良かった。今後も期待がもてる。昨年度も牛島憲之記念館で飯島一次との2人展が開催され、普段と違った活気があり、また牛島の作品も違う視点から見ることができてよかった。今後もあのような企画展を開催する予定なのか。

A 当館は府中をはじめ、多摩地区にゆかりのある作品を収集の基本方針としております。これまで評価されずに埋もれている良い作品もありますので、今後も資料を集め、皆様にご紹介できればと思っております。牛島憲之記念館におきましては、今後牛島憲之本人だけでなく、その周辺の作家との関係についても調査を進め、展示できればと考えております。

5人展におきましては、それまで無名であった戸嶋靖昌が、現在スペイン大使館で展覧会が開催され、NHKの日曜美術館アートシーンでも取り上げられております。当館での展覧会をきっかけとして、広く展開していく例として評価されたものと思っております。

また、近隣の美術系学科のある大学との連携や、多摩地区の主軸としての機能というものも、当館の将来的な課題と考えております。

Q 私はあまり多摩ゆかりの作家を知らないので、5人展は興味深かった。逆に言うと、そういった知られていない作家の企画展を開催することは、とても意義のあることだと思う。ただ、作家について企画展のために調査したことを、美術館の内部資料としてしか保管していないのは勿体無い。面白そうだと思って見に行っても、作品リストしかない美術館もあり、残念だと思う。せっかく研究したことを出版物として発行することは、研究成果を外部に周知するという意味で、利益を度外視しても重要だと思う。当館では企画展毎に図録を発行しているので、ぜひその中に調査結果を載せるような形で発行を続けて欲しい。

そういった意味では公開制作についての情報が少ないように思う。公開制作は作家の制作現場が見られる場でもあるので、作家のいない日でも制作の様子が動画で見られるようになると良い。また、そういった動画をアーカイブとして残して欲しい。インターネットでアクセスできるような形で公開されるとなおよいと思う。

A 美術関連の書籍は70年代に比べると現在は低調です。美術館の図録も一般書籍として発行できるのが理想ではありますが、難しい現状にあります。学芸員の調査結果が紙の形で残せるようにはしていきたいと思っております。

Q 学芸員という仕事をしていると、紙媒体で残すことの重要性を感じる。現在は様々な情報の伝達方法があり、情報化の時代でインターネットも発達してい

るが、結局後世に残るのは、ある程度の部数が刷られて各地に配布された紙媒体ではないかと思う。予算の確保では苦労するだろうが、できるだけ維持して欲しい。

また、当館は多摩地区の中心館のような役割を果たしている。中央線沿線には美術館が少なく、三鷹、国分寺、国立などいわゆる文教地区と呼ばれるところには独立した建物としての美術館がない。その中でも、当館は教育普及についてよくやっていると感心している。

Q アートスタジオは土日や夏休みだけで、平日に開催されていない。現在のアートスタジオは子ども向けの印象があるが、今後は大人向け、特に定年退職後の世代向けのワークショップなどを平日に開催してはどうか。せっかくの創作室が平日閉まっているのは勿体無い。アートスタジオはNPOなどではなく、当館の企画で実施しているのか。

A アートスタジオは当館の主催事業です。ボランティアとの協働事業でもあります。創作室の外部団体への貸出は行っておりませんが、平日の有効活用については今後検討してまいります。

## (2)「新しい時代の美術館運営」について

以下、 は各委員の発言、 は事務局

「引きこもりビジネス」というものがある。引きこもりの人達を対象にしたビジネスが成立すると言われるほど、彼らは美に対して見たり作ったりする積極性があるらしいが、美術館が関わることはできないだろうか。引きこもりの人たちに対して、自分たちで何かを作るといふのは有効らしいと聞いた。その場に指導する人がいてもいなくても、外出して関わりを持つことが重要だという。関西での事例を聞き及んだ。青少年の引きこもりや心の病に対して、現実を通して何かを見て考えるという生活の中に、アートスタジオ事業を関係させていくことはできないだろうか。それが将来美術館の文化の提供と同時に、経済的に価値のあるものを生み出せる可能性も示唆できないだろうか。

大事なことだと思う。引きこもりの問題や、不登校の問題に関しては、現在文科相が方針を変えてきている。これまではそれらを良くないもの、として対処しようとしていたが、今は不登校児を無理やり学校に来させる必要はなく、何か他の方法があるのではないかと考え始めている。私も個人的にはそれに賛成している。だとすると、今後美術館や生涯学習機関がそういった問題に関してできることがある、という可能性は多いにある。

実際にうらわ美術館でやっていた。美術館で予算化して実施することは業務的にも難しいので、美術館という場所を使いながら、NPOなどの団体が実施す

るという事例だったと記憶している。子どもに限ったことではないが、大きな集団の中に参加できない、という人に対し、美術館のような別の空間で、非日常を味わいながら創作活動をするというプログラムだったと思う。府中市でも引きこもり、不登校児の支援は行いたいと学校関係者の中で話が出ていたが、こういったことも積み重ねが大切で、そのプログラムに参加していた人が楽しんでおり、美術館に行くのが楽しみになる、という形で続いていけば素晴らしいと思う。

不登校や引きこもりの子どもたちにとっての美術館、というのは大きな意味があると思う。しかし、それが美術館としての機能なのか、事業として実施すべきものなのかというと、それは違うのではないかと思う。美術館にそこまでの負担をかけるのは難しいと思う。むしろ、活動主体はNPOなど他の団体が担い、美術館をどう効果的に活用するのかを考えていくのが現実的ではないかと思う。

不登校児と引きこもりの関係性は、かならずしもイコールではない。データとしても出ているが、一旦社会に出て、そこでつまづいたことが原因で引きこもりになるという。しかも、男女比では男性が多いというデータが出ている。その原因がどこにあるのか、という研究を進めていく必要はあるが、それらの人にも開かれているということが美術館として大事なのではないか。

市民ギャラリーにおいて、関東医療少年院の院生達の版画作品と、その指導者たちの版画の作品展が開催されたが、それを美術館が主催したというのは、非常に評価できる。市民ギャラリーが「開かれた場」として利用されている事もそうだが、普段から多くの市民に利用され、親近感を持ってもらえる場所だと思う。

誰にでも開かれている、ということが非常に重要だと考えております。その方法は全て万能にできるわけではありませんが、積極的にやりたいと考えております。

小中学生の鑑賞教室について。前回にも出ていた話題ではあるが、夏の子ども向け企画展はどの年代をターゲットに置くかによって内容が変わってくると思う。小学1年生と中学3年生では同じものさしで測れない。年度によって重点を変えていくのか、あるいはそれらを網羅した形で一つの展覧会と考えていくのかを検討してもらいたい。中学生の美術鑑賞はいつも夏休みの時期になるが、中学生がばれたんの展覧会を見た時に、果たして中学生としてふさわしいものかということ、少し物足りなさがあったようにも感じる。前年度のガリバーの展覧会は中学生の知的好奇心を刺激するような展示だったので、どの年代を対象とする展示であるのかによって、作品の見せ方が変わってくるのだと思う。

また一方で、鑑賞教室が府中市に定着し、毎年多くの小中学生が当館の企画展をみている。これは美術館というより学校側の課題だと思うが、鑑賞した児童にとって、その鑑賞がどのような教育効果があったのか、成果検証は難しいものの、それを形にしていく必要があると思う。府中市でこれだけの事業を実施してい

るので、その分他市の児童と違ったプラスの価値があるに違いないと思っているが、それを何らかの形で評価される時期にきているのではないかとも思う。

これから中学校の学習指導要領の見直しに伴い、芸術系科目の時間数もどうなるか分からない状況だが、鑑賞教室のような授業が児童の成長にどう関わっていくのかということを確認にはしにくいところが、他の教科との差になって出てくるという傾向があるため、今後美術館と一緒に取り組めればよいと思う。

学校側から子どもを見ると、教育という意味合いが強く、私は聞いていると子ども達が可哀想に思える。この作品は何歳の人が見なくてはいけない、というのではなく、また何歳以上の人が見たほうが分かりやすいというものでもなく、分かったか分からないかではなく、見た人がどう感じるかということが重要だと思う。美術館の展示に学校側からどうしてほしいという希望をだすのではなく、だれでも同じように見られる中で、学校がどう児童に説明するかが重要なのではないか。

そういうことではなく、小学校の低・中・高学年、中学生とそれぞれ段階があるので、対応の仕方、案内の方法に違いがあるということではないのか。どの作品をみせるのかという選定ではなく、見せ方、展示方法などについて、ということではないかと思う。

もちろん、小学生1年生と中学3年生が、同じ案内で良いとは考えておりません。また、中高校生の年代に対しての事業も、非常に大切だと思っております。夏休みの期間中に、中高生を対象としたワークショップの開催も検討できればと考えております。

鑑賞教室を活発に実施しているのは良いと思うが、それにかかる学芸員の負担は相当なのではないか。西洋、特にフランスの美術館では昔から実施されているが、ボランティアによる鑑賞ガイド事業を実施できればよい。美術館は希望者を募って解説員を養成し、来館者に対しては講習を受けたボランティアがガイドを行う。美術に興味をもち、ボランティア活動をしたいと思う人はいるので、そういった方たちと協働できればよいと思う。

そういったシステムは上手く機能すれば大変良いものだと思うが、むしろそういったガイドを養成・定着させるのにかかる時間や経費のほうが多いこともあり、結局自分たちでやってしまった方が早い、という所が大半だと思う。

鑑賞教室の資料があるが、どの小学校がどの企画展を見るのか、小学校で選んでいるのだろうか。日程ありきの鑑賞教室だとすると、たまたまその企画展を見たということになり、児童は見たいものと違うということがあるのではないか。

府中市内の小中学生につきましては、「学びのパスポート」というものがございます。このカードを持っていれば、いつでも無料で企画展を観覧できるという

ものです。紛失時にも、当館受付にて即時再発行を承っております。鑑賞教室は、当館に来館するきっかけになればよいと考えております。鑑賞教室の後に興味をもった企画展があれば、カードを持って当館に来館してもらえればよいですし、また、他の美術館にも行ってみようと思ってもらえれば最上と考えております。

広告・掲示板について、JR小金井駅方面の案内板が不足しているのではないかと常日頃思っている。市内の掲示板に貼られているチラシが風雨に晒されてみずぼらしくなっているのも気になる。もう少し良いものにはならないのか。

駅前に芸術劇場の専用の掲示板はあるが、美術館には専用の掲示板がない。市内の掲示板だと、上から別のチラシが貼られているのを見る。掲示板用にサイズの大いチラシは用意できないのか。

オリンピックについてですが、昨年、市制施行60周年記念ということで、各学校に作品を提出するようという指示があり、美術館で作品展示がされていたが、主管課だけで進んでいたためか、展示の仕方もひどく、会場には受付も看板もないし、市民から見たら美術館は何をやっているんだと思われかねないものであった。東京オリンピック開催に際しても同様のことがあるかもしれないので、何か関連展示を行うのであれば、あらかじめ美術館もプロジェクトチームに入って動いたほうがよいのではないかと。せっかく世界中から観覧者が来る機会でもあるので、世界との交流みたいなものと子どもとを関連付ける、ということができるようプロジェクトを考えながら落とし込む方法がよいと思う。オリンピックだから何かせねばならぬ、という考え方では効果的なものはできない。

重要な意見だと思う。上野の方でもオリンピックはスポーツの祭典だけでなく、文化的なものもやらなければならない、となっている。「何か考えてくれ」と行政側から丸投げされてしまう。やるのであれば、どこの美術館を中心にして動くのか、美術館側から動かなければいけないだろう。

若林奮の展覧会を楽しみにしていた。彫刻の良い作品が見られる機会でもあるし、常々地下のダイジーがぞんざいに扱われていることに、一人ずつ説明した気分だったので、今回取り上げられてとても良かった。新しいものを企画として取り入れることも良いが、既にあるものを「それは前にやったから」ということで終わりにしてしまわず、何度でも見るのが重要だと思う。例えば鑑賞教室で子どものときに見た作品を、大人になってから再度見ると、また感じ方が異なると思う。そういった幼い頃からの積み重ねが自分の考え方を形成するのだと思う。オリンピックは派手な行事ではあるが、当館はそういった派手な部分だけでなく地味なものも忘れずにいて欲しい。

この機会に美術館を主体に、府中市内に立派な広告塔を作るとするのはどう

か。掲示板を町中どんなところにも作るくらいのお金をかけて、美術館のポスターも全部の掲示板に掲出して欲しい。掲示板も、府中市を飾る美術の一つとして考えてもらいたい。

市内のお店にもっとポスターを掲示してもらってもよいのではないかと。また、地下駐車場が一時的とはいえ、物置のようになっていて見苦しいので片付けたほうがよい。

夜間開館について。よみうりランドで冬季イルミネーションをしているが、すごい人気で、冬だけで入場者数が40万人ほどいる。いつもならば閉めている場所や時間帯を有効に使うという良い例。仕事をしていると、平日美術館に行こうと思っても、まず開館時間に間に合わないのが難しい。どれだけ費用がかかるかわからないが、ワークライフバランスも定着してきており、これからは夜を楽しむ人も増えるのではないかと。これからの新しい時代、夜間を活用するというのはどうか。金曜日の午後7、8時まで開館しても入館者数は増えないかもしれないが、定着すればある程度の集客は見込めるのではないかと。

「混んでいるときの狙い目は夜」というキーワードがあるが、逆に言うと入場者数が少ないということでもあるので、収益的にはどうか。

見る側としては空いているのは助かるが。

特典をつけるという方法もある。例えば夜間の観覧料を安くするというように、夜間にくれば何か、というお得感があれば集客力もあがるのではないかと。

よみうりランドでは、ハロウィンの時に仮装をしていれば入場無料というサービスがあった。

同園では冬季イルミネーションについて、小学生以下は入場無料だった。

来場したときに期限付きの無料招待券をもらおうと、それまでに行かなくては、という気になる。

同園では、来年は干支が猿なので、名前に「さる」が入っている人は入場料無料としている。そういう話題性も一つの手法かと思う。

これだけたくさんの美術館が夜間開館を行っているが、夜間料金を別にするという館は見たことがない。画期的な発想ではないかと。

確か科学技術館では過去に夜間割引があった。展示室だけでなく、喫茶店と連携できないか。当館の喫茶店は閉店時間が早いように思う。例えば夜間開館の際にドリンクサービスをつけるというのはどうだろうか。

桜の綺麗な時期に、夜桜を見ながらお茶を飲む、というのは良いのではないかと。

美術館の開館時間が5時までだから、喫茶店も5時までとしているのだろうが、普通は展覧会を見た後でお茶をゆっくり飲みたい気分になるもの。喫茶店の開店時間を延ばせると良い。

ただ、当館は周囲が非常に暗い。何度か夜に来たことがあるが、昼のほうがよ

いと思う。これは公園や周辺のことだから美術館だけでは変えられないだろうが。

以前に、夏季夜間開館を実施したことがございますが、交通の便がよくないこともあり集客に繋がりませんでした。地の利というものが影響するものと思われれます。

定期的なものでなく、イベントだけでもいいかもしれない。

私は食べる物にも興味があるが、そういう人達にとっては歩くことが好きな人が多いように思う。当館は交通の便が悪いかもしれないが、歩くことが好きな人達に興味を持ってもらえるような案内はなにかできないか。目的地を当館として、その途中で色々楽しめるような中継点を作り、最終的に当館で作品鑑賞と喫茶店でのおいしい食事をとってもらおうというような。

かつての取組として、ボランティアと協働で当館までのウォーキングマップを作成したことがあります。予算の確保が難しいので、印刷物を作成したり広報費をかけたりすることができず、定着しなかったのですが、市民の力を借りて実施しまして、そういった取組も重要だと考えております。

夜間開館とすると、大半は車での来場が予想される。現在の当館の駐車場は美術館専用でないこともあり、利用者が限られてしまうので、今後來館者の増を考えるなら駐車場の拡充が必要だと考えられる。

基地跡地の検討を現在市で行っていると思うが、その中で是非美術館専用の駐車場を作って欲しい。あと、市内に画廊喫茶のようなものが少ないので、そういった事業者が入れるような何かができるとうい。

現在の駐車場は美術館で利用している人は少ないのではないかと。近くにスポーツをしている場所がたくさんあるので、その利用者が駐車しているように思う。人は立っているが、美術館の半券を見せるよう求められたこともないので、公園の利用者が多いときには、美術館の来館者が駐車できないということになるのではないかと。

駐車場敷地には、公園利用者は駐車できないと掲示してあります。ただ、生涯学習センター等の利用者も利用できる駐車場ですので、年間で見ますと6割は生涯学習センターの利用者で、美術館は3割程度という状況になっております。

交通の便ということでバスの話になる。先ほど引きこもりの人へのプログラムがないかという話が出たが、やはり足が遠いと、引きこもっている人は、なおさらなかなか来られないだろう。「何時に来てください」と言われても来られない。けれど迎えのバスがあり、そこから乗せてきて何らかのワークショップをする。高齢者と同様になるが、引きこもりの人であれば平日開催でも参加

できると思う。送迎者付きのワークショップとなれば、年代の関係なく、何か作りたい人の参加が見込めるのではないだろうか。

生涯学習センターがある程度その機能を備えていると思います。

美術館なら、ついでに絵も見られる。見たい人は見るだけでもいいし。

バスについては、ちゅうバスの本数をもっと増やして欲しい。現行の30分に1本では少なすぎる。

駐車場やバスなどの交通のアクセスについてはすぐに解消できる問題ではないと思うが、東京オリンピック関連の予算でハード面の対応も検討できるのではないかと期待する。

東京オリンピックというのであれば、それこそ府中の画家を世界に宣伝するいい機会と考える。これまで知られていない画家について、英語などの外国語で発信できれば、見てみようかと興味をもつ外国人が出てくると思う。作家の全体像が見られるような展示で、紹介文が英語というものがあるとよい。

当館の開館20周年が2020年にあたりまして、当館として培ってきたものを集約するような形で、多摩の美術風土というものを前面に押し出す展覧会を企画するというのも、当館としての一つのあり方ではないかと考えております。当館の20年の節目を世界にアピールできるチャンスだと考えると、多摩の作家を世界に見ていただける取組も、非常に大切な仕事ではないかと思われれます。

広報の面では、府中市が25万人都市になって、新しく市民になった人も多い中で、美術館の存在を知らないという人も多いのではないかと。市民にすら周知できていないという事実があると思う。転入者へ配布する資料の中に、美術館の無料招待券を同封するというのはどうだろうか。

市民でも当館のことを知らないということはあると思う。そのあたりは20周年に受けてもう一度洗い出しをする必要があると思う。

先ほどの提案と重複するが、ワークショップで高齢者向けのプログラムがあればよいと思う。平日の稼働率も上がるのではないかと。

どうしても美術館の事業は子どもに目が行きがちだが、今後の高齢社会を考えると、より幅広い層に目を向ける必要があると思う。

多摩地区の基幹館として、という話があったが、これからの美術館のあり方として、ネットワークの組み方が非常に大事ではないかと思う。巨大美術館ではない中で、相互に協力できる事は多いだろうし、そのあたりの充実は大事だと思う。また、今までにもネットワーク化の話はあるだろうが、美術館は美術館だけ、教育は教育だけ、大学は大学だけ、というようなバラバラのネットワークでは効果も見込めないと思うので、「文化」というようなくくりの中で、府中市が一つの核になりながらネットワークを形成できればよいと期待する。

ただ、その中でネックになるのがいつ集まるのかということ。全員で就業後の夜間に集まることも不可能ではないだろうが、そういう形にしてしまうとネットワークの継続が困難だと考えられる。特に教師は平日の日中、学校外に出ることが難しい状況にある。教育委員会から働きかけて、日中の会議にも参加できるような形になればよいと思う。

「多摩ミュージアムマップ」というものがあり、これを見ると多摩地区にも美術系大学など色んな美術館があり、多少ネットワークはあるように見えるが、本当の意味での活性化されたネットワークとは程遠いので、今後の課題だと思われる。特に多摩地域は今後いろいろな可能性があるので、具体的に考えていかなければならないだろう。

具体的にはどういう問題があるのだろうか。行政上の問題か。一緒にやろうというふうにはできないのか。例えば多摩川映画村（調布市多摩川流域。大映や日活の撮影所を中心とした通称）では、映画だけではなく、それに関わる色々なものが発生する。するとその文化と美術館などがコラボレーションする。そういった一大イベントを年に一度開催するようにすれば、もりあがるのではないか。そういうことは官民、市町村の垣根を越えて実施するのに何か問題があるのか。例えば決心すれば、すぐに美術館として対応できるものなのか。

どこかが手を上げて、他の機関を取りまとめ実施しようとするれば、確かに進む要素はあるだろう。ただ、やはり問題となるのが、例えば図書館のような施設であれば、ある程度どの図書館でも同じようなノウハウがあり、共有部分があるが、ミュージアムというのは館によってそれぞれ個性があるので、逆にいうと共有部分が少ないということだろう。

公立か私立かという問題もある。公立だからこそできることと、私立だからこそできること、という違いもある。ミュージアムマップには掲載されていないが、国際基督教大学の近くに中近東文化センターというものがある。ハムラビ法典碑のレプリカなどもあり、アラブの問題についてもクローズアップされていて見どころのある所だが、知名度は低い。そういった場所を発信できるような場として、例えば当館で他館について案内をする代わりに、当該館で当館を紹介してもらおうといった相互連携がとれると良い。

多摩地区のミュージアムネットワークにつきましては、当館で事務局を務めてもよいのではないかと、という話も出ております。

それでは当館の業務が増えるのではないかと。

当初、多摩ミュージアムネットワークにつきましては、町田市で助成金を受け、官民共同で進めてきた事業であります。現在はその助成金がなくなってしまったため、活動が宙に浮いてしまっている状況にあります。各館代表が集ま

り情報交換を行う連絡会は開催しておりますが、今後は誰かがこれをまとめていく必要があると感じております。業務の増になることは確かですが、多摩地区の美術館の将来を考えると、これも重要な業務と考えております。

### (3) その他

作品購入の予定はついたのか。

購入作品につきましては、今年度の購入候補作品について、これから府中市美術品収集選定委員会に諮る予定です。次年度以降につきましても、同様に府中・多摩という地域に根ざして、当館が収蔵すべき作品の収集を計画し、予算要求を行う予定でございます。

市民としては、永続して収集した作品を、系統的に展示室で見られるのを楽しみにしており、購入予算がつくことを期待している。

来年、答申案の策定のため小委員会開催にあたり、そのメンバーについて。会長、副会長の他、市民公募委員より佐藤委員、学識経験者より隠岐委員を選出。本日の協議にて教育分野での課題もいくつか出されたため、オブザーバとして中村委員と大杉委員にも協力を依頼。